

# 日露戦争下の国民生活と意識

## ——旧制岐阜中学校一生徒の日記を通じて——

羽田野貴仁  
(玉井研究会4年)

はじめに

### I 日記の背景と沿革

1 日露戦争下における日本国内の状況

2 羽田野太七の略歴

II 遠くの戦争 1904年(明治37年)4～6月

III 出征・負傷・戦死と戦後 1904年(明治37年)7月～1906年(明治39年)3月

終章

はじめに

1904年(明治37年)2月に勃発した日露戦争は、明治日本にとってまさに国の命運を賭けた戦争であり、明治維新以来最大の試練であった。それゆえ、日露戦争は、外交史や戦史などあらゆる切り口から数多くの研究がなされてきた。しかし、日露戦争下における国民生活や国民意識についての研究は寡聞にして少ない。これらを探る上で有用であるのが、戦時下において記された日記である。日露戦争期の日記としては、著名な政治家、文化人などから一般庶民に至るまで、様々な人々によって綴られたものが現存する。しかし、その中において、中学生によって記述されたもので公刊されている日記は少ない。本稿で読み解く、日記『机上の友(下巻)』は、筆者の曾祖父にあたる羽田野太七が、1904年(明治37年)4月～1906年(明治39年)3月までの期間にわたって記録したものであり、当時、羽田野太七は旧制岐阜中学校の4、5年生であった。本稿では、日露戦争期の日

記としては数少ないこの中学生日記を通じて、日露戦争下の国民生活及び国民意識の一端を明らかにしたい。

## I 日記の背景と沿革

### 1 日露戦争下における日本国内の状況

1904年(明治37年)2月8日、連合艦隊は旅順港外のロシア艦隊に対して奇襲攻撃を仕掛け、同日、陸軍先遣部隊が仁川に上陸を開始した。そして、翌9日に仁川沖において日露両海軍が激突し、10日に宣戦布告が行われ、日露戦争が勃発した。日露戦争勃発以前、日本国民は三国干渉を機にロシアに対しての憎悪を強め、1903年(明治36年)頃からロシアとの関係が悪化していく中で、多くの国民は次第に「日本はどのみちロシアと一度は戦争しなければならぬだろう」と決意するようになっていた<sup>1)</sup>。確かに一部では、伊藤博文の慎重的態度をほめるもの、今の参謀本部には信頼を寄せ難いとするものがあったが、しきりに政府の対ロシア交渉は軟弱であるとし、満鮮交換論を批判する新聞や扇動政治家のほか、中学4、5年生でも校友会の雑誌に、「起て東亜の美少年！」などと国民的自覚を促す論文をのせる者も出てきたという<sup>2)</sup>。

こうした状況の中、日本各地は日露開戦の報を聞き、沸き立つこととなった。例えば、神戸では、人々は夜になると街に繰り出し、おびただしい数の提灯行列をなして、楠公神社<sup>3)</sup>まで行進した。その数は6万人を数え、「バンザイ」「バンザイ」とあちこちで叫ぶ声は山々にこだまし、5マイル離れた場所からも聞こえるほどであったという<sup>4)</sup>。そして、将兵を満載した列車が朝から夜遅くまで通過するたびに、多くの人々が出迎えて歓迎し、神戸駅から兵庫駅までの線路には無数の日本国旗がはためき、家々の軒先には提灯が飾られた<sup>5)</sup>。

しかし、戦局が進み、周囲の犠牲が増えてくると、開戦直後の興奮は次第に冷却化し、国民は単純には戦勝を喜ぶことができない複雑な心理状況に陥っていた。例えば、1904年8月28日～9月4日にかけておこなわれた遼陽会戦において、勝利の報を受けた際、神戸の街は、「提灯と国旗で飾りつけられ、(中略)通りは喜びにあふれた顔の人々で埋まっているとはいえ、興奮して狂喜しているわけではなく、(中略)静かな態度」<sup>6)</sup>であり、当時、日本に滞在中であった大英博物館の標本採集員ゴードン・スミス<sup>7)</sup>は、このような様子を「国家にとっては偉大なる名誉がもたらされたとはいえ、多大な命を代償にした結果だと人々は知っているた

めで、近親者にも死傷者がいるのであろう。(中略)『勝った、勝った』と騒いだところで、現実には身近な人々が戦死し、負傷して帰還してくるだけに、大半の人々は心から喜びに浸る気持ちにもなれず、(中略)鬱屈したやるせない思いをせめて慰めていたのかもしれない<sup>8)</sup>と分析している。そして、こうした国民の様子は、1905年1月初旬の旅順陥落に際しても同様であり<sup>9)</sup>、開戦直後の興奮状態は、戦死者、負傷者が続出する中で、次第に冷めるようになってきていた。

そうした中で、戦時下における国民の日常生活は、食物・衣類に対する統制が無かったため、戦争による影響は軽減されていた<sup>10)</sup>。確かに柔弱・贅沢が排され、娯楽は軽視されるようになっていたが、大相撲、歌舞伎をはじめとする芝居は行われ<sup>11)</sup>、東京においては、戦時下の市民を慰めるため、祝勝にたびたび趣向をこらした花電車が走ったほか<sup>12)</sup>、1904年(明治37年)秋には、赤坂離宮で観菊会が催された<sup>13)</sup>。これらの事例から、戦時下においても日常生活には、比較的、物資の面で余裕があったことが窺える。

しかし、日本政府は、1905年(明治38年)1月頃より、米大統領ルーズベルトを通じた講和を模索していた。勝利を積み重ねてきてはいたが、多大な犠牲を払い、国家の継戦能力は確実に尽きようとしていたためであった。その結果、1905年9月5日、ポーツマスにおいて日露講和条約を締結することに成功したが、一部の国民にとっては大いに不満であった。東京の日比谷公園では条約締結に反対する国民大会が開かれ、新聞社や警察署、さらには電車までが襲撃された。

その一方で、戦後の日本国内の状況について、ゴードン・スミスは、「日本は戦勝したにも関わらず国内には高揚感もなく、むしろ疲弊した姿と、厭世的な気分が横溢した町になっていた<sup>14)</sup>と、神戸の街が多大な犠牲を払ったにもかかわらず、それに対して十分な見返りを手にすることができず、虚無感に襲われ、疲弊していたことを指摘している。

では、実際の国民一人一人について、日露戦争下の状況はどうであったのであろうか。それを窺う上において、日露戦争期に書かれた日記が数多く現存する。その一部を紹介すると、例えば、東京商科大学(現・一橋大学)学長を務めた上田貞次郎の『上田貞次郎日記<sup>15)</sup>は、1892年(明治25年)～1940年(昭和15年)の期間に東京で記述されたものである。当時、上田は東京商科大学の講師であり、その日記内容は、旅行や日々の交友関係、学校関係の仕事に関するものが多数であり、日常生活についての記述が淡々と綴られ、日露戦争に関してはほとんど記述されていない。また、後述するように羽田野太七と同郷であり、岐阜県厚見郡

の日置江村<sup>16)</sup> 議員などを務めた堀昌三の『岐阜中学校生徒冬期休業日誌 堀昌三』<sup>17)</sup> は、1905年(明治38年)12月22日～1月8日の冬季休業期間中に岐阜で記述されたものであり、その内容は、日露戦争に関するものが多く、開戦以来の連戦連勝を「天皇陛下の御威光」、「忠勇無双の軍人の力」によるものと称え、旅順攻囲戦の戦況に関心を寄せている様子が窺える。また、旅順陥落後に街で号外が配られた様子や、岐阜市の祝勝会についても記述されている。さらに、衆議院議員や宇和島市長などを務めた高島亀太郎の『高島亀太郎日記』<sup>18)</sup> は、1897年(明治30年)～1945年(昭和20年)に愛媛県宇和島市で記述されたものであり、その内容は、高島の職業である生糸商についてのものや、交友関係のことが多い。日露戦争に関する記述は、旅順攻囲戦や奉天会戦、日本海海戦に関するもの、知人の出征を送るもの、戦死した友人の葬式についてのものなどが見られる。

しかし、これらの日記は日露戦争の全期間を通じて記述されておらず<sup>19)</sup>、『上田日記』と『高島日記』については、戦争に関して言及した記述がそれほど見られず、戦時下の民衆の心理を読み取ることは難しい。本編で紹介する日記は、著者の曾祖父にあたる羽田野太七が旧制岐阜中学校4、5年次に記したものであり、本日記は開戦直後の約2カ月は欠けているものの、上述した日記類に比べ、日露戦争に関する記述は全体の約6分の1と多く、心理の変化を追うことも可能であった。なお、日記の舞台となった岐阜県は、日露戦争において全国最多の4000人という犠牲を出しているが<sup>20)</sup>、日露戦争下の岐阜県を記録した日記で公開されているものは寡聞にして少ない<sup>21)</sup>。

## 2 羽田野太七の略歴

本編で紹介する日記『机上の友(下巻)』は、1904年(明治37年)4月4日～1906年(明治39年)3月31日までの間に書かれたものである。本日記が記述されていたかかる期間は、日露戦争の戦中、戦後の時期に該当し、本日記は、開戦直後の約2カ月を除き、日露戦争のすべての期間と戦後の6カ月間を含んでいる。

日記の著者である羽田野太七は、1886年(明治19年)、岐阜県郡上郡西和良村小那比(現在の岐阜県郡上市八幡町小那比)の農家の長男として生まれた。村立小那比尋常高等小学校<sup>22)</sup>を卒業後、岐阜県立旧制岐阜中学校に入学し、日露戦争期はこの学校で過ごした。その後、岐阜師範学校へと進学し、卒業後は、岐阜市で小学校の教師としての道を歩み、定年後は母校の岐阜県立岐阜高等学校で事務職員として余生を過ごした。以下に、羽田野太七の略年譜を掲げる。

- 1886年（明治19年） 父金弥、母きぬの長男として、岐阜県郡上郡西和良村小那比（現・岐阜県郡上市八幡町小那比）に生まれる
- 1893年（明治26年） 小那比尋常高等小学校入学
- 1900年（明治33年） 小那比尋常高等小学校卒業
- 1901年（明治34年） 岐阜県立旧制岐阜中学校（現・岐阜県立岐阜高等学校） 入学
- 1906年（明治39年） 同校 卒業
- 岐阜中学卒業後は、岐阜師範学校（現・岐阜大学教育学部）へ入学
- その後、岐阜市立明德小学校教諭を経て、岐阜市立本荘小学校で教頭を勤め、定年退職
- 定年後は、岐阜県立岐阜高等学校の事務職員
- 1961年（昭和36年） 逝去 享年75歳

本日記は題名が示す通り、本来は上下巻共存在していたと思われるが、現在は下巻のみが確認されている。日記の形態は、半紙をニツ折りにしたものを綴じており、総頁数は156頁、総字数は約5万字に及び、全期間を通じてほぼ毎日、墨を使用して記述されている。記述内容は、当時、旧制岐阜中学校の4年、5年次に在籍していたこともあって、勉強やスポーツなど、学校生活に関するものが中心であり、日露戦争に関する記述としては、戦況や出征、負傷、戦死した周囲の人々などに言及したものがあり、その他には、旅行、歌舞伎見物や大相撲見物などの娯楽、当時の交通状況や食生活、郷里の農村の暮らしに関するものなどがあった。

羽田野太七が在籍していた旧制岐阜中学校は、1873年（明治6年）に大観社仮中学として創立され、その後、分離、合併を繰り返し、1901年（明治34年）に岐阜県立岐阜中学校となった<sup>23)</sup>。敷地内には、寄宿舎が設けられ、全員で60人ほどが入舎していた。羽田野太七も遠方であったため寄宿舎に入舎し、通学していた。当時、校友会である華陽会<sup>24)</sup>によって発行されていた機関誌『華陽』<sup>25)</sup>によると、寄宿舎の雰囲気は、「秩序的だが、上級生と下級生は親密かつ、家庭的で皆概して学業を励み、品行も宜しかった」といい、寄宿生は、「1ヶ月に1、2回程ずつ、食堂において茶話会が開かれ、演説、お伽噺、落し話、吟詩、剣舞、唱歌、その他種々各得意のものを演じ、愉快な一夜を過した」<sup>26)</sup>という。さらに、寄宿舎の生活については、「冬期の場合、起床午前6時 朝食7時 朝の自修7時半

より8時半まで 登校9時 昼飯正午 入浴午後4時より6時まで 夕食5時 門限6時 人員検査6時10分 夜の自修6時10分より7時半まで・7時40分より9時まで 消灯9時半」とあり、放課後は、「新聞を読むなり、散歩に行くなり、運動をするなり、気の向いた事」をして過ごしていたようであり、上記のような生活は、本日記からも確認することができる。

また、羽田野太七は旧制中学に在籍していたが、1905年(明治38年)の旧制中学の在学率<sup>27)</sup>は全国で4.3%と低く<sup>28)</sup>、明治中期～後期の旧制中学は、留年や中途退学が多かったため<sup>29)</sup>、卒業者の割合は、1905年(明治18年)生まれの者で、全国で1.1%、岐阜県では、1901年(明治34年)の段階で、約1.2%と在学率を下回るものであった<sup>30)</sup>。初等教育から中等教育への進学率低迷の原因としては、親の教育への関心の低さに加え、経済的理由も存在した<sup>31)</sup>。当時、旧制中学は、各県に数カ所しか設置されておらず<sup>32)</sup>、遠方から進学する者にとっては、学費に加えて寮費や仕送りなどの経済的負担が存在した。それゆえ、授業料をふくめて月に十数円の教育費を、何年にもわたって負担できる家庭は、経済的に限られていた<sup>33)</sup>。また、そもそも旧制中学校の前段階である高等小学校への進学が可能である者が少なかったため、旧制中学はより狭き門であった。日記の著者が小学校に在籍した1893年(明治26年)～1900年(明治33年)という期間は、第二次小学校令により、初等教育の修業年限が尋常小学校で3年または4年、高等小学校で2年ないし4年と定められ、尋常小学校が義務教育とされていた。しかし、1899年(明治32年)頃の時点で、尋常小学校の就学率は、全国72.75%、岐阜県73.3%と、100%に及ばず、高等小学校に至っては、全国で33.3%、岐阜県では7.5%とさらに低いものであった。この数値からも分かるように、旧制中学のみならず、その前段階の高等小学校へ進学するということが、非常に困難なことであった<sup>34)</sup>。したがって、当時の旧制中学校は親の教育意欲と経済的豊かさに加え、学歴という3つの要素を兼ね備えた一部の人々が通うことができた教育機関であった。それゆえ、日記の著者は実家から仕送りを受けて、寄宿舎で生活しながら旧制中学へ通学し得たことから、経済的に比較的余裕があり、旧制中学在籍という当時としては稀少な学歴を有する人物であったことが分かる。

なお、日記の紹介に際し、日記の大半は岐阜市において記述されているが、第二章が扱う1904年(明治37年)4月～同年6月までのうち、1904年(明治37年)4月4日～4月7日は、故郷の岐阜県郡上郡西和良村小那比及び岐阜市に至るまでの途上において記述され、第三章が扱う1904年(明治37年)7月～1906年(明治

39年) 3月までのうち、1904年(明治37年) 7月19日～8月31日、1905年(明治38年) 12月21日～1月9日、同年3月24日～4月9日、同年7月19日～8月30日、1906年(明治39年) 3月25日～同27日の期間は、故郷の岐阜県郡上郡西和良村小那比及び岐阜市に至るまでの途上において記述されていることを付しておきたい。

また、記述は、紙面数の関係上、日露戦争に関係する部分を抜粋し、カタカナは平仮名で、旧漢字は現漢字で表記し、誤字(あるいは誤記)と思われる箇所は〔ママ〕で補った。

## Ⅱ 遠くの戦争 1904年(明治37年) 4～6月

日露開戦から数カ月が経過し、陸軍は朝鮮半島の仁川への上陸を開始し進撃を開始、海軍は旅順口閉塞作戦に着手し始めていた。しかし、一度の作戦で大量の犠牲が出るということはほとんどなかった。本章は、かかる状況下において記された1904年(明治37年) 4月～同年6月までの時期の日記を読み解くが、そこでは日露戦争の勃発による影響が、日記の著者にほとんど及んでいなかったことが確認できる。当時期において多く記述されたものは、4月28日の日記に「本日は遠山先生の English の試験ありき」とあるように勉学<sup>35)</sup>に励む姿である。また、5月20日の日記に「本日は授業後野球<sup>36)</sup>稽古す」とあるように野球などのスポーツ<sup>37)</sup>に関する記述も多く見られた。さらに、4月9日の日記に「余は安藤□男氏と散歩し八間道<sup>38)</sup>ビーフ屋に突進し□来れり」との記述が見えるように友人と食事<sup>39)</sup>をし、トランプ<sup>40)</sup>をして遊ぶなど、楽しい学校生活を送っていた様子も窺えた。その一方で、戦争の影響が窺える記述としては、5月15日の日記に「此頃今回時変<sup>〔ママ〕</sup>に際し本縣の馬を徴発せり」とあるように軍による馬の徴発が始まったという程度であった。

また、この時期の日記からは、未だ日露戦争と日記の著者との心理的距離が大きかったことも窺える。例えば、黒木為禎陸軍大將率いる第一軍が鴨緑江<sup>41)</sup>を渡河した直後の4月28日の日記に、「新聞上に見るに我軍は此頃鴨緑江を渡りたり」とあり、当時期においては、情報の大半を新聞や公報などから得ており、直接戦地を体験した人物から得ていなかった。また、戦争において使用された砲弾などの実物も直接目にしておらず、戦争による損害についても淡淡と記述し、それに対する感想などは何ら述べられていなかった。

しかし、戦争との心理的距離が大きかったとはいえ決して無関心であった訳で

はない。日記からは、日記の著者だけでなく、旧制中学校の生徒たちも日露戦争の推移を注意深く見守り、大いに戦勝に歓喜していたことが分かる。日記の著者はこの時期、戦局の推移を記録するとともに、積極的に号外を集め、日記中に切り貼りしていた<sup>42)</sup>。号外は、例えば、「陸軍の南関嶺の戦闘」などそれほど大規模な戦闘でないものまでが切り貼りしてあり、このようなところから、戦局に多大な関心を有していたことが分かる。また、新聞、号外のほか、雑誌からも日露戦争に関する情報を積極的に集め、日本軍の勝利に対して、例えば、海軍によって5月3日に決行された旅順口の第3回閉塞作戦の報を受け、翌日の日記では「愉快愉快愉快愉快愉快」と大喜びしており、さらには快進撃を続ける日本陸軍を5月8日の日記においては「神軍」、同月16日の日記では「神兵」などと絶賛していた。加えて、5月7日の日記では、旧制中学校の生徒たちが寮の茶話会において「事変に対する感」を論じており、また、5月15日に起きた戦艦初瀬などの沈没に際しては、5月20日の日記に「本朝新聞従覧室に於て大騒なし居れり」とあり、生徒たちがこの報を受けて動揺していたことが分かる。こうしたことから、日記の著者を含む旧制中学校の生徒たちは日露戦争を国家の一大事として捉え、戦争の行方を注意深く見守り、戦勝には大いに沸き立っていたことが分かる。

また、日記からは、岐阜の市民も日露戦争の推移に対して大きな関心を寄せ、戦勝に沸いていたことが確認できる。4月19日の日記に「本日は授業后小島、□村、大場と散歩を試み序に郁文堂に寄り博文館、戦争実記<sup>43)</sup>六、八を求む」という記述から、岐阜の街では、『日露戦争実記』など戦争を特集した雑誌も早速発売されていたことが窺え、大阪毎日新聞などの号外も発行されており、5月23日の日記には、「戦勝祝にて市中大賑ひ且種々の<sup>(ママ)</sup>三カ有りて終日大騒なりき」とあるように、数多くの人々が参加して賑やかに戦祭祝が開催されていた様子も確認できる。

このように、開戦から数カ月が経過した1904年(明治37年)4月～同年6月までの時期は、物資的な余裕があり、日常生活への戦争の影響はほとんどなかったことが分かる。また、戦争は、羽田野太七にとって新聞や雑誌などの媒体を通じて知る「遠い存在」であり、彼を含めた多くの学生や岐阜の人々が、戦局の推移に注目し、戦勝気分浸っていたことが分かる。



### Ⅲ 出征・負傷・戦死と戦後

1904年（明治37年）7月～1906年（明治39年）3月

前章で述べたように、開戦直後、仁川に上陸した陸軍は、その後、兵力を増強し、1904年（明治37年）7月頃より乃木希典大將率いる第三軍が遼東半島の要衝である旅順の攻略を開始した。同年8月には、黒木大將率いる第一軍の他、第二軍、第四軍が遼陽においてロシア軍を撃破した。同年7月頃に開始された旅順攻囲戦は、ロシア軍要塞を前に苦戦を強いられ、多大な犠牲を払っていたが、1905年（明治38年）1月初旬、旅順要塞を守る関東要塞地区司令官ステッセル中将が降伏したことにより、ようやく勝利を収めた。そして同年3月には、日露戦争最後の大会戦となった奉天会戦において勝利した。このように、大陸において、陸軍が、遼陽、旅順、奉天という戦局を左右する3つの大規模戦闘において勝利を収めていた1904年（明治37年）7月～翌1905年（明治38年）3月までの戦局は、辛くも日本優位で推移していた時期であった。

しかし、その一方で大規模作戦が増加するに伴い、日本軍は一度の戦闘で多大な犠牲を出すこととなり、前線の将兵、弾薬数などが不足し始めていた。それゆえ、陸軍は、奉天会戦後の1905年（明治38年）3月～8月の期間は、兵力及び弾薬の不足などにより、大規模作戦に着手することが不可能となっていた。以上のような戦局の影響により、日本国内においては、開戦以降、出征する者、負傷して後送されてくる者、戦死して無言の帰郷を果たすものが相次いでいた。また、政府は嵩む戦費に苦しみ、その国力は確実に低下し、継戦能力は尽きようとしていた。それゆえ、日本政府は1905年（明治38年）5月の日本海海戦の大勝利を日露講和のきっかけの一つとし、同年9月、日露講和条約締結に成功した。

以下、本章では日露戦争後半期から講和へ、さらに講和以後の日記を読み解いていきたい。

まず、戦時下にあたる、本日記の1904年（明治37年）7月～1905年（明治38年）8月までの記述からは、上記で触れたような日本政府の苦しい立場とは対照的に、前章同様、羽田野太七の周囲の日常生活には、戦争による大きな支障は生じていなかったことが分かる。日記の著者は、勉学<sup>44)</sup>やスポーツ<sup>45)</sup>に励むなど、普段通りの学校生活を過ごし、休日には、例えば1904年（明治37年）9月23日の日記に「美殿座<sup>46)</sup>の芝居見物せん（略）役者は坂東蓑助市川団三郎なり実に面白かりき」とあるように歌舞伎見物をしたり<sup>47)</sup>、同年10月1日、2日の日記に「二時出発し

車一個に種々の用具を積み(略)華陽を出て八時犬山に着す」とあるように友人と愛知県犬山に旅行に出掛けるなど<sup>48)</sup>、余暇を楽しむこともできた。また、食生活についても、前章と同じく、1月15日の日記には饅頭、3月1日の日記には牛肉を食した記述が見られ、特にケーキに関する記述は多く<sup>49)</sup>、食糧に窮していなかったことが窺える。こうしたことから、日露戦争による日常生活への支障はほとんどなかったと言えよう。

しかし、日常生活への支障は及んでいなかったものの、前章の時期とは異なり、羽田野太七には、次第に日露戦争が身近なものとして捉えられるようになってきていた。例えば、1904年(明治37年)8月29日の日記には、「今回親戚なる生屋<sup>50)</sup>長尾宮太郎へ召集会下り九月一日鯖江入営す可き事となりたり夫が為め彼の宅に参上して之を祝せり」とあるように、1904年(明治37年)7月頃から、中学校の先生や郷里の親戚、更には友人など、周囲にいた人たちが次々と出征することになり、彼らを見送ることが多くなっていった。また、同年8月17日の日記には「羽田野友一<sup>51)</sup>君の来信を見る依て兵士の有様察するを得たり」とあるように、出征した友人や親戚から戦地の様子について手紙を受け取り、兵士の様子を知ることになっている。さらに、1905年(明治38年)4月4日には「本日今回日露事変に当たり二竜山<sup>52)</sup>に於て名誉の戦死を遂げられたる羽田野周太郎君の葬式ありたり(略)実に盛大なるものなりき」と、戦死者の葬儀が盛大に行われている様子が窺える記述も見られ、このような部分から、戦争が身近なものとなってきていたことが分かる。

さらに、同年9月20日の日記では「本日は授業後友人数名と(略)戦争より待ち帰りたる榴弾及び弾片小銃弾丸(略)実に現に戦場に居るが如き感ありて出征兵士の心中万分の一を遠察するを得たり」と砲弾や弾丸などの実物を見て、「戦場に居るが如き感あり」と記述し、更には、同年9月27日の日記で「高堂<sup>(ママ)</sup>へ集合し元本校体操教員たりし横橋宇太郎<sup>53)</sup>先生(少尉)(略)遼陽に於て足を負傷せられ今回名古屋へ帰営せらるる途中岐阜迄来り(略)八時より遼陽攻撃の話ありたり」と戦場から帰還した軍人による講演なども学校で開催されるようになった。加えて、翌1905年(明治38年)1月16日の日記に「本日授業後は今回旅順の捕虜を名古屋に送る為め岐阜駅を通過する故に之を見に停車場に行きし」とあるようにロシア兵捕虜も岐阜の街に送還されてきたことなどから、日露戦争が現実的なものとして捉えられ、戦地と羽田野太七との心理的距離が狭まっていたことが窺える。

また、このような戦争との心理的距離の狭まりは、日記の著者に、日露戦争に対する心境の変化を次第に生じさせたことが分かる。それは、例えば、当時期において、周囲の人々の犠牲者や負傷兵の惨状を実際に目撃するようになり、同年9月12日に岐阜駅に負傷兵の慰問に行った際には、同日の日記に「実に其の有様気の毒次第なり」、「吾は一種異様感に打たれた」とあり、また、同月14日の日記には、同じく負傷兵の慰問に行き、「実に哀しなりき」と記述し、その惨状に大きな衝撃を受けていた部分から読み取ることができる。さらに、全体的に自身の心情を詳細に記述することはなかったが、翌1905年（明治38年）7月21日に故郷の友人が戦死したとの連絡を受けた際には、同日の日記に「嗚呼願（ママ）はば此勇士は満州の野に於て只一発の豆より小さき弾丸と国の為め身命を争ひ遂に名あり戦死を遂げられたるなり」と、字体を大きく乱して記述し、悲しみに暮れている心情を吐露するようになっていた。

しかし、依然として岐阜の街は、前章の時期と同様、戦争に対して関心を持ち、戦勝の報に沸いていたことも日記からは読み取れる。特に、旅順陥落に対しては、1904年（明治37年）8月13日の日記で「国民は（旅順陥落を一註筆者）今や今やと待ち構え居るなり」と記述しているように、今や遅しと待ち望んでいたことが窺え、旅順が陥落すると、翌1905年（明治38年）1月7日の日記に「本日は愈旅順陥落祝日にして（略）午后二時頃より諸方より各自得意の作物を得来れり」とあるように学校や村全体で祝賀会が催された。この他、日露戦争で使用された実弾などを展示した会も催され、1904年（明治37年）9月20日の日記で「師範及び中学生之を見た者多し」と記述しているように、大いに賑わっていたことが分かる。

他方、明治後期にあたるこの時期において、天皇の存在が日記の筆者を含め、当時の国民にとって大きなものとなっていることにも注目しておきたい。日記の筆者は、1904年（明治37年）11月2日の日記で「御製 天皇陛下には出征兵士を思ひ賜ひ次の歌あらせられたり 寢覚にも思いつる哉軍人むかいし方の便いかにと露営の月を詠ず（上等兵春名武雄） 今日ありて明日散る身にも恋しきは露営に結ぶ故郷の夢 風に散る花の名残に結ぶらん 露おく野辺の古里の夢」と日露戦争に関する御製を日記中において詳細に記述するようになっていた他、1905年（明治38年）11月15日の日記には、「本日は今回の平和克復に付大元帥陛下の伊勢参宮上遊るに付き吾等武装して七時の汽車に乗り名古屋に至る（略）学生整列し肅然として迎へり」とあるように、学校全体で天皇を名古屋駅にまで出迎えていた。

さらに、日記からは、日記の著者の故郷である郡上・小那比の人々には、強固な結びつきが保たれていることも分かる。本稿には紙面の都合により掲載できなかったが、日記の著者は、中等・高等教育機関への修学を援助する奨学機関である「郡上青年会」<sup>54)</sup>の会合に頻繁に出席し<sup>55)</sup>、長期休暇を利用して帰省していた際には、近隣の家々へ農作業などの手伝いに赴き、「小那比祭曲」など数多くの郷里の祭りなどにも参加していた<sup>56)</sup>。また、1904年(明治37年)8月2日の日記に「本日は郷社に於て戦勝祈祷会ありたり」と記述があり、村を挙げての戦勝祈祷会に参加し、4月4日には、同日の日記に「今回日露事変に当たり二竜山に於て名誉の戦死を遂げられたる羽田野周太郎君の葬式ありたり余は父の代理として赴きたり」とあるように郷里の戦死者の葬儀にも出席し、郡上・小那比の人々には強い結びつきがあったことが確認できる。

上述したように、日露戦争は1905年(明治38年)9月に日露講和条約が締結され、終戦を迎えた。戦後の日記からは、戦時下の生活から平時の生活へと戻りつつあることが窺える。当時期には、凱旋将兵の出迎えの他は日露戦争に関する記述はほとんど見られなくなり、大半は活動写真<sup>57)</sup>や修学旅行<sup>58)</sup>、スポーツ<sup>59)</sup>、奇術<sup>60)</sup>や歌舞伎見物<sup>61)</sup>など、学校生活や娯楽などの日常生活についてであった。

他方、戦後も、岐阜の街が戦勝に沸いている様子が確認できる。これは、例えば、1905年(明治38年)12月6日の日記に、「今回の日露戦役にあたり名誉を双肩に帯びて凱旋せらるる満州軍総司令長官大山大将及び参謀兎玉大将の当駅御通過に付生等武装して之を送迎せり」とあるように、大山巖大将や兎玉源太郎大将などを迎え岐阜駅が賑っていること<sup>62)</sup>、さらには、同年9月28日の「今回の勝利品岐阜市忠愛婦人会が尽力により九州団より借受来り東別院に於て陳列会を催されし故是を閲覧に行けり」という勝利品陳列会に関する記述や、同年11月2日の「午後八間道菊楽園を見物に行きたり実に精巧なるをして内にも戦経千本桜及波艦全滅(略)の作人形等驚くものなり」というロシア・バルチック艦隊を全滅させた日本海海戦を再現した菊人形展覧会に関する記述から、戦勝を祝う催しが岐阜の街で度々開催されていたことから分かる。

日記の著者は、日露講和を受けて、これまでの戦時下のようにただ戦勝を喜ぶだけでなく、平和が到来したことに安堵していることが分かる。これは、1906年(明治39年)1月1日に、「本日は目出たくも千代の春即ち一月一日を□に平和と凱旋を合せたる新年を迎へたるなり」と記述していることを窺うことができる。

こうして、旧制岐阜中学校の卒業と共に、日記はその最後を「good by」とい

う言葉で締めくくられ、書き終えられている。

## 終章

以上、本日記を通じて、日露戦争下の国民生活について分かることを以下に挙げておきたい。

第一に、日露戦争による旧制中学生への影響は、ほとんどなかったことである。日記の筆者は、戦時下においても勉強やスポーツなどに励み、通常通りの学校生活を送っていたことや、牛肉料理やケーキなど十分な食事をすることもでき、休日には歌舞伎や大相撲見物、さらには友人との旅行を楽しむことができた。また、冒頭で述べたように、戦争に関する記述が日記全体の約6分の1程度しかなく、こうした点からも、日常生活が戦争一色に染まっていた訳ではないことが分かる。

第二に、日露戦争下において、日本国民としての意識と愛国心が確立されていたことである。岐阜の街だけでなく日記の筆者を含めた旧制中学校の生徒たちも日露戦争の行く末を注意深く見守り、戦勝には大いに沸いていた。さらに、羽田野太七は、天皇に関する記述も残し、一個人にまで天皇の存在が大きくなっていくことが確認できる。こうした記述は、他の日記においても確認することができ、日露戦争によって、国民が一致団結して戦うという状況が生れ、天皇の存在が大きくなり、日本国民としての意識と愛国心が確立されたと言える。

第三に、周囲の人々に犠牲が及ぶなど、日露戦争が次第に身近に迫るようになってくるに従って、常に戦勝に沸いている岐阜の街との間に、日露戦争に対する日記の著者の心境との相異が生じ始める瞬間が見られたことである。当初、羽田野太七は、戦況に関して詳細に記述し、号外の切貼りをするなど、戦勝の喜びを全面に出していたが、戦争が身近に感じられるようになってきた日記の中盤以降、そのような記述は、ほとんど見られなくなっていた。また、岐阜駅に到着した負傷兵を見て、衝撃を受けている記述も見られ、こうしたことから、「戦争の現実」を知るにつれて、戦勝を単純には喜べる心境ではなくなり、戦争の終結を受けて、戦勝を喜ぶだけでなく、平和が到来したことに安堵する姿が見られたといえよう。

### 注

- 1) 小宮豊隆『明治文化史 第10巻趣味娯楽編』（原書房、1980年）以下、『明治文

化史』と省略、159頁。

- 2) 同上。
- 3) 兵庫県神戸市中央区、湊川神社。
- 4) 伊井春樹『ゴードン・スミスの見た明治日本―日露戦争と大和魂』（角川学芸出版、2007年）以下『ゴードン・スミスの見た明治日本』と省略、30頁。
- 5) 同上、43頁。
- 6) 前掲、伊井『ゴードン・スミスの見た明治日本』、75-77頁。
- 7) リチャード・ゴードン・スミス（1858～1918）英国出身の大英博物館の標本採集員。1898年（明治31年）12月に初めて日本を訪れ、日露戦争中は日本に滞在し、一市井人の目から日本を記録した詳細な日記を残した（前掲、伊井『ゴードン・スミスの見た明治日本』、11-12頁）。
- 8) 前掲、伊井『ゴードン・スミスの見た明治日本』、75-77頁。
- 9) 同上、78、79頁。
- 10) 同上、168頁。
- 11) 同上、161、165頁。
- 12) 同上、165頁。
- 13) 同上、166頁。
- 14) 同上、142頁。
- 15) 上田正一『上田貞次郎日記』（上田貞次郎日記刊行会、1965年）。上田貞次郎（1875～1940）上田章の次男として生まれる。正則予備校（現・私立正則高等学校）、東京高等商業学校（現・一橋大学。以後、高商）、高商専攻部貿易科へと進学。卒業後は、高商講師を務める。明治大学、日本大学の講師を経て、東京商科大学教授に就任。東京商科大学学長も務めた。法学博士（上田正一『上田貞次郎日記』〈泰文館、1980年〉、285、286、287、288、290、293、294頁）。
- 16) 岐阜県岐阜市日置江。
- 17) 岐阜県教育委員会『岐阜県教育史 史料編 近代二』（岐阜県教育委員会、1998年）、269-273頁。堀昌三（1890～1954）堀治郎の長男として生まれる。岐阜中学校卒業後、第八高等学校を経て京都帝国大学法科へ進学。後、日置江村会議員、村学務委員、鏡島銀行取締役などを務めた。
- 18) 川東淸弘、三好昌文『高島亀太郎日記』（愛媛新聞社、1999年）。高島亀太郎（1883～1972）高島三郎の長男として愛媛県北宇和郡宇和島町に生まれる。宇和島高等小学校卒業後、家業である生糸商を手伝い、父の死後、家業を継ぐ。後、宇和島町会議員、愛媛県会議員、宇和島市議会議員などを務め、衆議院議員に当選。宇和島市長も務めた。
- 19) 『上田日記』は、記述されていない日数が多く、『高島日記』は1904年（明治37年）分が散逸している。
- 20) 日露戦争当時、岐阜県の兵士は、主に福井県敦賀市の歩兵第19連隊もしくは、福井県鯖江市の歩兵第36連隊に召集、編成され、大島久直中将率いる第9師団の一員として北陸三県の兵士と共に、日露戦争の大転換点となった旅順、奉天という2つの最激戦地を転戦した。（中川彰宏『日露大戦史 岐阜県戦没者芳名録』

- 中川書房、1906年、291頁)。
- 21) 『堀日誌』は、未公刊である。
  - 22) 現在は、廃校。
  - 23) 河嶋章『岐中岐高野球百年史』(岐中岐高野球百年記念行事実行委員会、1984年)、1、42頁。
  - 24) 1890年(明治23年)に設立された学術講談会を前身とする岐阜中学校の校友会。1895年(明治28年)、校内の別組織であった運動会と合併して華陽会となった。(岐阜県教育委員会『岐阜県教育史 通史編 近代二』岐阜県教育委員会、2003年、273頁)。
  - 25) 校友会である華陽会から発行されていた機関誌。華陽会の前身である学術講談会が発行した、『学術講談会雑誌』が前身(同上)。
  - 26) 木村ちすむ「寄宿舎通信」(『華陽』第34号、1904年3月23日)、207-215頁。
  - 27) 在学率は、該当年齢人口に対する在学者の比率。天野郁夫『学歴の社会史 教育と日本の近代』平凡社、2005年、162頁。
  - 28) 同上。
  - 29) 望田幸夫『国際比較・近代中等教育の構造と機能』名古屋大学出版会、1990年、312頁。また、当時は、入学者の年齢に数年の幅があり、在校生年齢は、下が12歳、上になると20歳を越える状況にあった(前掲、岐阜県教育委員会『岐阜県教育史 通史編 近代二』、280頁)。
  - 30) 『壮丁教育調査概況1』(『近代日本教育資料叢書 史料編4』宣文堂、昭和47年復刻)、岐阜県教育委員会『岐阜県教育史 別編二 調査・統計資料』岐阜県教育委員会、2005年、28、62頁より計算。ただし、当時の旧制中学は、入学年齢に多少の差異があるため、この数値は概算である。
  - 31) 前掲、天野『学歴の社会史 教育と日本の近代』、162頁。
  - 32) 当時の岐阜県の場合、県立岐阜中学校の他、県立斐太中学校(現・岐阜県立斐太高等学校)、県立大垣中学校(現・岐阜県立大垣北高等学校)、東農中学校(現・岐阜県立東濃高等学校)の4校が設置されていた(前掲、岐阜県教育委員会『岐阜県教育史 通史編 近代二』、254頁)。
  - 33) 同上。
  - 34) 前掲、岐阜県教育委員会『岐阜県教育史 通史編 近代二』4、6頁、前掲、望田『国際比較・近代中等教育の構造と機能』、309頁、前掲、天野『学歴の社会史 教育と日本の近代』196、204頁、前掲岐阜県教育委員会『岐阜県教育史 別編二 調査・統計資料』岐阜県教育委員会 2005年、28頁。
  - 35) 例えば、4月21、28日、5月4、28日、6月29、30日。授業内容に詳しく言及した記述はないが、大半の記述に「授業後」という表現が見える。
  - 36) 日本における野球の歴史は、1873年(明治6年)開成校(東大前身)において教師ウィルソン、コチエットの2人のアメリカ人が初めて学生に教えたことに始まる。(前掲『明治文化史 第10巻趣味娯楽編』、587、588頁)。旧制岐阜中学の野球部の創部は、明治17年(1884)年ごろであり、明治33(1900)年、通学生チームと寄宿舎チームはすべて華陽会野球部に統一されたとされているが、この

記述の仕方からは寄宿舎チームは依然存在していたことが窺える。(前掲、河嶋『岐中岐高 野球百年史』7、39頁)。

- 37) 例えば、野球に関する記述は4月12、13、17、20、24、29日、5月10、11、14、15、16、17、18、19、20、22、23、30日、テニスに関する記述は4月10、13、20、21、23、24日、5月1、7、8、15、22、24日、6月1、2、8、10、19、27日、サッカーに関する記述は5月18日、6月21、23、26、27日、柔道に関する記述は5月29日に見える。
- 38) 現・岐阜県岐阜市神通通。道幅が、八間(幅約14m)あまりだったためこの名称がついた。
- 39) 4月9日には牛肉、同11、17日には饅頭、同28日にはラムネ、6月17日にはチマキ、同19日にはケーキを食べたという記述がある。
- 40) 4月15、16日、5月1、21、24、28日、6月1、6、12、19日に記述がある。
- 41) 中国東北部にある川。現在は、中華人民共和国と朝鮮民主主義人民共和国の国境となっている。
- 42) 切り貼りがされている号外の見出し、新聞名、発行年月日は以下の通りである。「露都の爆裂弾騒動」「敵の旗艦沈没公報」「旅順砲撃統報」(『大阪毎日新聞』明治37年4月16日)。「敵艦の元山来襲公報」「敵艦元山来襲」「敵艦来襲」(『大阪毎日新聞』明治37年4月26日)。「金州丸轟沈事情公報」(『大阪毎日新聞』明治37年4月29日)。「我軍九連城を占領す」(『岐阜日日新聞』明治37年4月29日)。「旅順港内の爆声」「旅順艦隊自ら爆発す」(『大阪毎日新聞』明治37年5月11日)。「大連湾東方の威嚇攻撃」(『大阪毎日新聞』明治37年5月13日)。「吁不幸!我艦沈没」(『新愛知』明治37年5月20日)。「陸軍の南関嶺占領」「西山艦隊敵塁砲撃詳報」(『大阪毎日新聞』明治37年5月28日)。「旅順の強行偵察」(『大阪毎日新聞』明治37年5月31日)。
- 43) 博文館から若年層を対象に発行されていた、『日露戦争実記』。約130頁構成で、定価は10銭。10日に1冊の割合で毎月3回発行されていた。内容は、日露戦争関係の地図、政治家・軍人・外交官などの巻頭写真、記事というものである。
- 44) 前章と同様、日々の記述では「授業後」と触れる程度で授業内容には詳細には言及していないが、1904年(明治37年)7月末、同年12月末、翌1905年(明治38年)3月末、7月末はテスト勉強及びテストに関する記述が多い。
- 45) 例えば、野球に関する記述は、1905年(明治38年)2月19日、5月19、20日、テニスに関する記述は、1904年(明治38年)7月5、8日、9月4、6、9、11、12、13、14、18、19、21、23、24、25、26、28日、10月4、5、7、8、9、10、11、12、13、25、26、28、30、31日、11月6、9、18、19、24、25、27日、翌1905年(明治38年)1月11、13、15、20、27、30日、2月1、5、12、16、26、28日、3月2日、4月19、24、5月4、8、10、11、12、15、16、18、21、22、25、26、27、31日、6月4、5、7、8、9、10、11、14、15、26、27、28日、サッカーに関する記述は、1904年(明治37年)12月1日、6月27日、柔道に関する記述は、1905年(明治38年)1月11、19、22日、5月9日、6月7日、相撲に関する記述は、1904年(明治37年)10月3、5、7日、11月22日、剣道に関する記述が、1905



- 年（明治38年）1月11日、卓球に関する記述が、1905年（明治38年）6月12日に見える。
- 46) 現在の岐阜県岐阜市美殿町にあった芝居小屋。明治22、23年ごろ泉座という名称で建設され、明治30年に改築して美殿座と改称された（前掲『岐阜県教育史史料編 近代二』、263頁）。
- 47) 歌舞伎見物に関しては、その他、9月22日にも記述がある。
- 48) 旅行に関する記述としては、その他、1904年（明治37年）10月16、17日に岐阜県揖斐郡揖斐川町の谷汲へ、同年11月20日には岐阜県関市へ、翌1905年（明治38年）4月10日には寄宿舎の遠足旅行で同じく関へ、同年5月28日には岐阜県大垣市赤坂にある金生山へ行っている。
- 49) ケーキに関する記述は、1904年（明治37年）9月10日、10月22日、12月10日、翌1905年（明治38年）2月4、25日、3月29日、5月16日に見られる。
- 50) 現・岐阜県郡上市八幡町小那比生屋地区。
- 51) 親戚。1881年（明治14年）郡上郡西和良村（当時）生まれ。予備陸軍看護士赤十字社正社員。小学校訓導。1904年（明治37年）5月15日、第9師団第二野戦病院編入。旅順要塞攻撃、奉天大会戦に参加。1905年（明治38年）1月18日に日本へ凱旋。1月26日、召集解除（前掲『日露大戦史 岐阜県戦没者芳名録』、170頁）。
- 52) 旅順要塞の戦略的要衝の1つ。
- 53) 旧制岐阜中学校体操科担当教師。陸軍予備少尉。1904年（明治37年）3月6日の予備召集により、第三師団〈名古屋〉第六連隊付として動員。1904年8月28日～9月4日の遼陽会戦に参加し、足を負傷して帰還。1904年（明治37年）3月発行の『華陽』第34号には、「横橋宇太郎先生の出征を送る」と題して出征についての歓送文が掲載されている。（『華陽』第34号〈華陽会 1904〉、201、202頁）。
- 54) 郡上青年会のことを指す。明治後期には、中学校をはじめとする中等教育機関が整備され、全国の主要都市には高等教育機関が開設されるようになった。それに伴い、「地元」から学歴エリートを輩出し、人材の育成を図るといった観点から、中等・高等教育機関への修学を援助する奨学機関の整備も進められた。1899年（明治33年）1月8日、郡上郡出身の在京「青年を奨励し学生中見込あるものに相当の保護を与へて其成業を計らん」ことを目的として、奨学機関郡上青年会が設立された。同会は、旧郡上藩主の子息青山幸正を会長とし、東京の旧藩主邸に本部、郡上郡八幡町と岐阜市にそれぞれ支部を置き、その活動を開始した（前掲岐阜県教育委員会『岐阜県教育史 通史編 近代二』、435頁）。
- 55) 郡上青年会に関する記述は、1904年（明治37年）6月7、24、25日、7月9、16日、10月6、26、27、29、30日、11月9日、翌1905年（明治38年）1月18、28、29日、2月23、25日、3月6、17、19、20、21日、4月11、13、28日、5月2、13、14日、6月29日に見られる。
- 56) 故郷の郡上・小那比の祭りに関する記述は、1904年（明治37年）8月3、24日。
- 57) 1906年（明治39年）2月10日。
- 58) 1905年（明治38年）12～14日に岐阜県関市及び愛知県犬山市方面へ行った。

- 59) 野球に関する記述は、1905年（明治38年）9月21日、10月4、7、8、11、18、21、22、27日、11月8、12、13、16、19、20、21、23、24、25、29、30日、12月4、5日、翌1906年（明治39年）1月9日、2月4、7、8、12、18日、テニスに関する記述は、1905年（明治38年）9月29日、10月28、29日、サッカーに関する記述は同年11月26日に見える。
- 60) 1905年（明治38年）11月27日の日記に「松旭齊天一の芸美殿座に於て執行せられし故舎生一同見物」とある。
- 61) 1905年（明治38年）9月17日の日記に、「本日は今回岐阜美殿座へ来りし市川羽左衛門、尾上梅幸、尾上菊□郎（六代目）尾上松助の東京歌舞伎一座を見物に行きたり」とある。
- 62) 凱旋将兵の出迎えに関する記述は、その他に、1905年（明治38年）10月26日、11月4日、12月3、8日、翌1906年（明治39年）1月30日にも見え、12月8日は第一軍司令官黒木陸軍大将の出迎えに関する記述である。